

第9回「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」

中国人強制連行を考える会 川見 一仁

安野へ

前日のセリーグ・クライマックスシリーズ勝利の余韻に浸る広島は雲に煙っている。朝9時15分に宿舎を出発。広島駅前から8名を迎え25人が乗ったバスは10時前に安野へ発つ。バスとは別に各国の留学生の皆さんらを乗せた車も並走していると伝えられる。小雨がぱらつき始める。

簡単な自己紹介と、フィールドワーク資料および「安野ー中国人強制連行の歴史を歩く(1997年3月発行)」の配布に次いで、1997年に「強制連行された中国人被爆者との交流をすすめる会」が制作したDVD「50年目の叫び」が上映される。四半世紀を隔てた対面。生存者・遺族らの映像を通す声が懐かしい、思い出す25年近く前の日々。写真とはまた違った記録の力強さ。30分はあっという間に流れる。

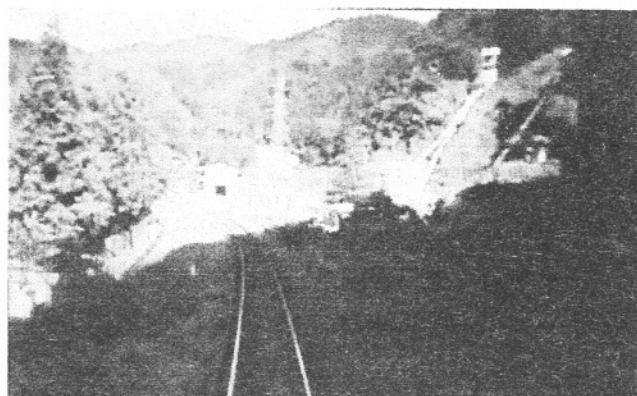
「車窓進行右手が“技術と信頼の(有)吉村石材店”だ」と紹介される。そうか、碑に名前を刻んだのはここだったのだ、碑が建つとあたかもその場所で刻銘されたように錯覚していた。

フィールドワーク

雲の切れ間から青空が見え陽光がさす。善福寺に立ち寄り11時ジャスト中国電力安野発電所に到着。社員数名が待機している。発電所の門前でフィールドワーク開始。車内で配られた資料を広げながらおよそ40



名が川原さんの説明に耳と目を集める。番号の小さい1号機が後からできたこと。中国人を使役した発電所2号機は1943年に起工し1946年に完成した、坪野・津浪・香草・土居の4か所のようなすが説明される。朝鮮人800人も働いていたが実態は分かっていない……。今は廃線となった国鉄可部線が目の中の道路部分を走っていたのだという。次いで、中国人強制連行につい



三段峡へ向かう列車から安野発電所を望む
(可部線が走っていたころの貴重な写真)

て、生活の場所から連行された際の状況や各収容所での強制労働のようす。

20分ほどの説明の後、「安野 中国人受難之碑」へ移動。企業交渉、裁判、和解の内容、基金事業、碑の建立……。説明を聞きながら容赦ない時の流れを思う。

「50年目の叫び」の画像を通して会いまみえた生存者たちの幾人が今もご存命だろうか。一方でその時の流れは和解基金事業により248名へ和解金を届け、6次199名の訪日団を迎えた年月でもある。資料のく来日した受難者・遺族の発言から、毎回の「和解の意義を深める交流会」で交わされた訪日団の感想・意見が紹介される。

泣くように雨が降り出す。テントに入り雨を避ける人、傘を取りにバスへ戻る人。雨について11時45分から水路管上部へ登り始める。凡そ10分で貯水部に立つ。先行した中国電力の社員が2号機の概要を説明してくれる。いつもは施錠されているがこうした催し

の際は便宜を図ってくれるのだという。社員の説明はさすが仕事の自負にあふれ、参加者の質問にきよく応える。建設工事の説明に「強制連行」という言葉が交じることに、これまでの繋がりを思う。土木工作物のメンテナンスを日々大切に行い、未来も使えるようにしている、貯水部は造った時のままだという。2号機の発電量7,700KWは凡そ8,000軒の電力需要を賄えるそうだ。足元のコンクリ床に丸く空いているいくつもの穴は空気穴だと初めて知った。12時17分には一同が碑前へ戻る。

テントで待っていた栗栖薫さんの証言が始まる。1944年8月当時、西松組配下の吉田組が栗栖宅に事務所を構えていたこと、中国人が連行された当初は、それなりの食料（メリケン粉、コーリャン、とうもろこし）を得ていたが、年末にはまともな食料が途絶え、小学生がドングリを採集して搾油したものを供出するその搾りかすを食べさせていたこと。

中国人と日本人との関係がひっくり返った1945年8月15日から中国人が帰国する11月22日までの百日間は、中国の人たちとの接し方・付き合い方がとても大変だったこと。

現場にいる日本人の男は吉田組の親方くらいで、あとは朝鮮人男性が鍛冶屋から削岩機やコンプレッサーまで全部扱っていた。中国人はトンネル内の水に濡れ、削岩した礫の鋭角に足を裂き、30cmの積雪のなか裸足で行う作業、連れてこられた時には「イ・アル・サン」の掛け声を合わせながら現場に向かった人たちが、疲弊し声もなく隊列も組めなくなっていく姿。逃亡した中国人の内腿を棒で殴る制裁を指図する軍人。栗栖さんの証言は1944年8月からの1年間、中国人を使役する酷さに戻っていく。



辛い証言を終え、12時40分過ぎから車内やテント内で昼食。発電所構内のトイレを参加者が借用できるよう社員が案内のため待機していた。

第9回中国人受難者を追悼し平和と友好を 祈念する集い

1時半から「西松安野友好基金運営委員会」「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」主催による「第9回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」が始まる。雨は上がったがいつ降り戻すかという空模様。司会用・挨拶用のマイクはテント内側に入れてある。司会は岡原美知子さん、通訳は楊小平さん。



黙とうに続いて、主催者より、内田雅敏さん、篠原収さん、邵義誠さんを代理して張振倫さんがそれぞれ挨拶する。西松建設代理人の高野康彦弁護士は欠席。

来賓挨拶で安芸太田町小坂眞治町長と中国駐大阪総領事館曾琳副領事は所用で欠席と紹介されるが、安芸太田町はこの日町長選挙の投票日だったのだ。善福寺の藤井慧心住職、広島県教職員組合石岡修執行委員長のご挨拶を頂く。

竹内ふみのさんによる二胡演奏を碑前に捧げたのち、二胡の音色と共に献花。小雨の中で参加者勢揃いの記念写真を撮り終えたのは2時25分だった。

善福寺で追悼法要

2時50分から善福寺で追悼法要が始まる。1958年に遺骨が祖国へ帰るまで、お寺では受難した中国人5人の遺骨を預かっていた。現在、遺骨は天津の「在日殉難烈士・勞工紀念館」に眠っている。曲さんら遺族

が善福寺に贈った掛け軸を楊さんが即妙の訳で紹介する。住職は、お寺の上手に火葬場があり火葬にした骨を骨壺に収め白布に包んで守っていた、このような壺ですよと見せてくれたが、掌に少しはみ出るほどの大きさだった。焼香の作法を説明し、「仏説阿弥陀経」を25分で？と問う住職に川原さんが20分でとお願いするのも微笑ましい。



谷キヨコさんが線香を上げる

お経が終わり、張さんからご住職へ遺骨を守ってくれたこと、毎回の追悼法要について感謝の言葉を述べ、毎年お土産は緑茶ですが今年はジャスミン茶ですと住職に手渡した。続いて裁判にも協力なされた谷キヨコさんへもお茶を贈る、92歳の谷さんは今年も碑前での追悼の時間を共にし、法要にも参加している。同じくお茶を贈られた栗栖さんは「当時を思い起こしながらじっくりと味わいたい」とお礼を述べた。中国の受難者に人生をじっくりと振り返り、希望を信じることのできる晩年を過ごしてもらえると、それが和解なのだとあらためて思った。



張振倫さんから
お土産のお茶を受け取る栗栖薫さん（右）

今回中国からは3名の運営委員の皆さんが来日されたが、修剛さんは16日中に帰国するためこの日の行動には参加しなかった。

張振倫さんから今回の感想が話される。9回目の来日になるが若い人が参加しているのがうれしい。昨日のシンポジウムでも歴史事実に立脚して客観的に調査研究していることに大いに学んだ。中国でも若い人に伝えて行きたい。安野の受難生存者は現在5名となった、父邵義誠は、日本の皆さんがどんな活動をしているのか気にしている。来年天津で会えると思うとのこと。

続いて劉宝辰さんは、昔は日中平和交流というのととても遠い感じだったが今は身近に感じる。ある女性から2017年に西松安野友好基金が終わったあとはどうするの？と聞かれたのだが、あなたがお子さんを連れて参加してくださいと話した。中国では日本のように社会活動にかかわる機会は多くないが、中国でも働きかけて行きたい。来春、天津の勞工紀念館で追悼会を開く。安野の生存者・遺族・家族248名に案内を出し、2017年4月8～10日に集まってもらう予定だ。2015年に国家レベルの紀念館となり西松安野のことも多く展示されている。大勢の皆さんが参加することが日中友好にも通じる、と挨拶した。

川原さんが2017年10月の第3日曜（16日）に「第10回中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」を行なうことを呼びかけ、15時35分に法要を終えた。

集いの準備・運営にあたった皆さんが車で帰えるのを見送りながら、バスは15時50分前に善福寺を出発。大雨の際は土砂崩れで交通止めもあるという191号線から高速道に入っていく。広島市内の太田川橋を通過したのは16時36分。17時前には広島駅に到着した。

（翌17日のインターネットニュースは安芸太田町の町長選で小坂眞治候補の当選を報じた）